

著書『マーガレット・フラー：近代への扉—ジェンダー、階級、人種』を語る
上野 和子

Key Word 超絶主義 共和国思想 欧州の啓蒙主義 (ルソー、ジョン・ロック)

A. マーガレット・フラー (1810-50) 略歴 ボストン生まれ、旅行記『五大湖の夏 1843』ジェンダー論『十九世紀の女性』、アメリカ初の女性ジャーナリストとなる。欧州では、ワーズワース、ジョルジュ・サンド、カーライル、革命家マッツィーニやミツケヴィチに会見、欧州絵画や歌劇、アメリカ彫刻家の隆盛、新産業都市のスラム化を報道、パリ2月革命の社会主義者—サン・シモン派やフーリエ主義者と交流し、イタリアでは革命家マッツィーニ、ガリバルディの活躍を支援した。ローマ共和国樹立と崩壊の証人となったフラーは、最後まで民主的共和制国家の到来を希求した。帰国途中、海難事故で死去。

B. 1. 旅行記『五大湖の夏 1843』

(1) ^{フロンティア} 辺境 (五大湖) の移民たち、

青空の下、外国の民族衣装で旅にやつれた貧しい家族たちが毎日のように辿りつく。シカゴ側では、白い帆の幌馬車 (Hoosier Wagon) の列がゆるゆる動く。
*P26 だが、新天地にはヨーロッパ文化の模倣スタイルが女たちを苦しめる。

(2) フラーのインディアン体験 マッキノー島 (ヒューロン湖) で9日間過ごし、立ち退き料を取りに来たチペワ族オタワ族の平和な家族生活を観察 P 37

(3) [滅びの民] 政府や教会のインディアン政策を非難 P 40 政府や辺境の人々のみならず、教会のカルヴァン主義の教条性や傲慢な姿勢を攻撃。インディアン文化の保存提唱、民話 (クマをお嫁さんにもらった熊撃ちの話) や Mrs Jemison 『インディアン捕囚記』 G. Catlin の絵を紹介。

2. ジェンダー論『十九世紀の女性』(1845)

(1) ヴィクトリア朝時代の女性神話の破壊

産業社会の発展と移民の流入によって、女性たちは都市部で職場を追われるようになった。女性の社会的地位は、イギリスのコモン・ローが慣習法としてあり、極めて低かった。女性は弁護士、医者、牧師、上院議員になれず、選挙権もない。結婚すると夫に同化する (法的死) を被り、財産を所有できず、商業取引の契約もできず、子供の養育権もない。給料は男性の3分の1だった。

(2) 女性の自己信頼・自己修養を主張 P69 超絶主義クラブ、エマソンのエッセイ 'Self Reliance と同じ地平線から出発している。

もし、女性にどのような仕事ができるとかと尋ねられたら、なんにでも

と答えましょう。女性は船長にだってなれるのです。P70 (WXIX115)

(3) 新プラトン主義プロクリスの性格分析 LGBTQ擁護 P68 人間に備わる性格を表す 24 の各層が、時に一部強く現れることで、男性女性の性格が定まる。人間の性向は多様でその差異は液化する固体の各段階の層のようなものである。

(4) グローバルな視点 様々な人種だけではなく、古今東西の歴史的な人間(エジプト神話やエリザベス女王)をも含む。その結果、キリスト教的な父権制度や教会文化、ヘブライズム世界のみならず世界には多彩な社会が存在し、広範な文明論を展開し存在論的認識をも広める啓蒙書となった。

3. ヨーロッパの旅—イギリス (1846~50)

(1) 同行者奴隷制廃止運動家、社会改良運動家、クエーカー教徒のスプリング夫妻の影響で奴隷制廃止運動家を評価する。

(2) 史跡観光：湖水地方・アボッツフォード(ウォルター・スコットの館)訪問。

ロッセレーヴェン湖(王女メアリーが長年入牢した城跡)

スコットランド王女メアリー・スチュアート(1541-87)の素描

スコットランド王ジェームズ5世の死により、生後6日で王位継承。フランス宮廷で育てられ、16歳で14歳のフランス皇太子、フランソワ二世と結婚。仏王アンリ二世の死でフランス王妃となるが、2年後フランソワ二世の死でスコットランドに帰国。ダーンリー卿と再婚。秘書のリッチオを寵愛したが、リッチオの死の原因とされるダーンリー卿が暗殺され、彼女はボズウェル伯と再再婚。ボズウェル伯の反乱軍に負けた彼女はロッセレーヴェン城に入牢、王女退位。

確かに、王女メアリーの人生の過酷な帳簿に、これほど厳しい代価が強要されたものはないであろう。彼女の地位と治世は、その善意を勧めるには力及ばず、彼女を危険の淵に導いた。彼女の才覚は、敵を苛立たせ、味方を落胆させるのみであった。しかもこの極めて魅力的な女性は愛人たちの破壊者となった。三度の結婚で、メアリーは妻として一度も幸福ではなく、自ら選んだ人間関係についても、自分の選んだ男の愛を、たとえ一週間たりとも所有することも維持することもできなかった。だから、ダーンリー卿はその怒りをリッチオにぶつけるため、彼女と生まれてくる赤ん坊の命を危険にさらした。しかもダーンリー卿死後、ボズウェル伯と結婚した数週間後には、メアリーは「自殺するから刃物を持ってきて」と叫んだと言われている。息子と娘、二人の子供を産んだが、子等は孤独と悲しみの中で育ち、幼少の折に親から引き離され、息子は母親を憎むように育てられ、娘は直ぐに修道院に入れられた。十八年間の幽閉期間に、[...] せめて人生の穏やかな期間、刺繍を続けたメアリーの目を閉じさせよ。(TSGD-71)

(3) イギリス新産業都市のスラム化と社会改革者たちの取り組み

a. エディンバラから、リバプール、マンチェスター、ロンドンで彼女の心に痛ましく焼き付いた庶民生活の映像は、根本的な打開策を必要とした。そこからフーリエの社会協同体運動 (Associationists-Fourierism) の趣旨を悟った。

*リバプールや、グラスゴー、とりわけロンドンのような場所の街路の恐怖や悲嘆には、人は無感覚になるか、毎日死ななければならない。この人間と人間の運命の恐ろしいばかりの不平等を忘れることはできない。[...] あえてわが国での悲惨や悪徳防止のために試みる社会協同体活動家を非難できるだろうか？

*私は、グラスゴーに大変優秀な知的社会があることを理解しているが、数時間の滞在で、そのような人物にひとりも会わなかった。ここは、[...] 他地域よりもむしろ地獄と言った方が当たっている。人々は狭いところに押し込められ、無感動と墮落が明白に見て取れ、凄惨そのものである。とりわけ女たちがうす汚い恰好で、その顔の物憂げで絶望的な苦悩の表情は、ダンテの地獄の門の碑文よりも、悲劇的である。(TSGD 79)

b. 社会改革者たちの活躍紹介—ジョージ・ドーソン、ジョン・フォックス、ジェイムズ・マーティノー、ウィリアム・ロベットとフェミニストたち。

(4) ワーズワース訪問、ロバート・バーンズの詩 For a that and a' that 紹介

4. フランス オペラ、芝居、絵画、歌手などの芸術批評と革命への道

(1) 『ドン・ジョヴァンニ』『セビリアの理髪師』『フェードル』女優ラシェル

(2) ジョルジュ・サンドのフェミニズム的小説、ポーランドの愛国主義

(3) フーリエ主義者・サン・シモン活動家たち—フェミニストたちの悲劇

5. イタリアの近代化と 1848 年革命

A. イタリア彫刻界は新古典主義が全盛 カノーヴァ、トルヴァルセンが人気

米国人ハイラム・パワーズのギリシャの奴隷像は、ロンドンの第一回万国博覧会で有名。



アントニア・カノーヴァ

「キューピッドとプシュケ」



ベルテル・トルヴァルセン

「ゼウスにお酌するガニメード」



カノーヴァ作ワシントン像



ハイラム・パワーズ

「ギリシャの奴隷」像

B. イタリア・カトリック社会への反撥—ウィーン体制下イタリアの統一や独立について意見まちまち。(1) 穏健派 サルディニア王国の貴族。近代化社会望む

- (2)立憲君主派 ミラノ主要都市の商工業者、政治的統一より経済的統一を望む。
(3)国民主権共和主義国家の建設 マッツィーニ、ジョベルティ『イタリア人の道徳的、文化的優越』(1843) 教皇を頂いたままの連邦制を主張。

【教皇の叙任式】 1847年大晦日、フラーはローマや他の町のあらゆる場面で教会や王侯貴族の専制政治に不快感を表し、盲従する庶民に対してもいらいだちを隠せない。教皇の執り行う儀式は人間性に対する侮辱であり、修道院制度は、非人間的であると感じた。フラーは、その虚飾や偽善を見逃さず、高位聖職者の連なる儀式に苦々しさを感じ、[...] その形式と本質を結合させる。
*今朝、私はクィリナール宮殿で教皇による官吏の就任式を見学した。教皇は白と金色の礼服を纏い、[...] 真紅と白、紫と白という縦縞の制服を付けた近衛兵に伴われていた。新官たちは幅広の白襟に黒の職服を着けていたが、就任の宣誓後、驚いたことに実際に教皇の足元に接吻した。卑しい服従を表す以外、このような行為は決してないと思っていたので、私はその行為を極めて卑屈だと感じた。天なる父は子らが足元に膝まづくことを、よしとしないであろう。せいぜい肩のあたりに胸と同じ高さでよいではないか(TSGD 184)

ここには、エマソンが一八三二年、ボストン第二教会を辞職した理由とまさに同様の精神が働いている。エマソンは、聖餐式の際牧師が信徒にパンとワインを授けるという行為に、違和感を捨てることができなかった。[……] 彼は教会の形式主義への攻撃、ユダヤ社会の過ぎ越しの祝宴という歴史の解釈、そして魂を束縛する外的権威の拒否などを明確に述べている。フラーもエマソンも、位階制度を役割としてしか理解しなかった。位階制度は[...] 人間の尊厳の上下を意味するものではなかった。ソローも評論「市民の反抗」(1848)において、政治機関や政府も政府の常備軍も「便宜上」(expediency)のために、必要であると説いている(Thoreau 1996: 224)。独立戦争後、半世紀たった東部の知識人たちは、堂々と民主的平等主義を推し進めることになった。フラーの言葉通り、大英帝国から独立を勝ち取ったアメリカは、旧大陸で困難に直面しているイタリアの模範になれるのである。

C. 1848年欧州各地で革命の火—パリ2月革命、ミラノの5日間(3月18日)、ヴェネツィア共和国(3月22日)樹立のニュースにローマでは歓喜の声がこだました。多くの若者がコロセウムで入隊手続きをとり、ロンバルディアへ行進していった。フラーは、ミラノ臨時政府の捕虜交換要望書、ミツキエヴィチのポーランド支援の演説も英訳し『トリビューン』紙に掲載した。

〔ピウス9世の教皇訓示〕4月29日

ピウス9世からオーストリアとの戦争を認めないとする教皇訓示が出され、イ

タリア全土からピエモンテ・サルディニアに合流した義勇軍は大騒ぎになった。ローマの義勇軍は教皇からの庇護や奨励を期待できなという驚くべきニュースを受け取った。もはやピウス9世の下で戦えないとわかって軍全体が仰天した。〔…〕ローマ軍は頼りにしていた規律あるナポリ軍や大砲を奪われることになった。これらすべての不和や落胆が策謀を生み出す原因となるのだ。(TSGD 233)

ナポリ軍の撤退と人民感情 ナポリ軍の撤退を拒絶した将軍グリエルモ・ペペは、自分と共に残るように軍隊に呼びかけた。しかし彼らの軍隊には愛国的な感情はほとんど見られなかった。〔……〕逡巡したのち、多くの兵士たちは王の命令に従い撤退した。彼らに多くの愛情と名誉の手向けを送ったローマの諸領では、彼らの退却に対して強い嫌悪感と侮蔑を示すのに手ぬるくはなかった。多くの町では軍の退却に道を開けようとしなかった。小さな村々でさえ、彼らに冷水を与えるのを嫌った。兵士たちは恥辱と憤怒に包まれた。一人の将校は耐えられず自殺した。兵士たちの無学の心に、他のイタリア諸州に対する憎悪が沸き上がった。特に、内乱の際に暴政の道具となる自分たちの身分に、そしてそれはそのままローマ教皇に対する憎悪となった (TSGD 234)

フラーはとりわけ教皇の無策を呪い、今度の訓示によりローマ市民は父親を失ったと嘆いた。歴史的観点から言うと教皇の役割矛盾が表出したのだ。教皇はイタリアの君主として解放戦争を支持すべきだが、カトリック教会の長としてカトリック国家（オーストリア）と戦争はできなかった。だが、ローマ市民は教皇が最終的には自由主義政策を手放すという見識は持ち合わせなかった。

教皇領では首相の辞任が続く。ペレグリーノ・ロッシ伯が9月教皇領の首相となる。開明的な行政で教皇俗権の維持を主張したが、高慢な性格で敵が多い。11月15日ロッシ暗殺。教皇ピウス9世11月24日ナポリ王国ガエータに逃亡

D. 英国での亡命生活から帰国したマツィーニ・ローマの名誉市民

1849年2月9日ローマ共和国樹立

- a. 教皇を支援するカトリック系諸国の軍勢が、ローマ共和国に向かう。南からはナポリ軍、東からはオーストリア軍、西からはスペイン艦隊が迫っている。
- b. 国内改革、紙幣の印刷が急務であるが、金貨は国外へ流出し財政が逼迫している。政府は出版物の検閲を廃止、星室庁裁判、宗教裁判や司教の教育権を廃止、教会財産を国有化、宗教関係の建造物は貧民用のアパートに転用、国有化した土地は分割し農民に授与するなど多くの改革が示された。1848年、49年の農民政策は欧州で最も進歩的と言われた。
- c. 1849年4月25日仏軍の攻撃—1万2千の軍勢でウディノ将軍チヴィタヴェ

ツキア港上陸

4月30日 フラーの病院監督—ベルジョヨーズ侯爵夫人から依頼される。

*ガリバルディの善戦一戦いの開始時、部下を城壁外のコルシーニ宮殿に配置、勝敗半ばに突然の攻撃をかけるゲリラ戦法。イタリア軍敗色強し。

6月12日 ウディノ將軍の最後通牒、ローマ共和国側は拒否

6月22日 午前2時ローマ市の城門から仏軍侵入。

6月30日 ルチアーノ・マナラ（ミラノの5日間で英雄となる）、六百名の
ンバルディア砲兵中隊と殉死。ガリバルディは降伏を決意→ローマ共和国崩壊

7月2日 ガリバルディのローマ脱出（ロマン主義的描写）

ガリバルディの槍騎兵が次々に全速力で疾走していった。彼らはみな身のこなしが軽やかで、強靱な身体をもち、イタリア南部のこの上なく洗練され、雄々しくも美しい姿で、[...] 死をいとわぬ豪胆な魂を表す高潔で端正な顔立ちをしていた。私はウォルター・スコットがこの世に甦り、彼らの姿を目にして欲しいと思うほど、このように美しくロマンティックで、かつ悲壮な光景は見たことがない。ローマを知るものはあの広場独特の荘厳さを知っているであろう…夕日が傾き、三日月が昇ってきて、イタリアの若者の華が荘厳な場所に行進して行く。彼らはイタリア独立の砦として全身全霊を傾け、各地から駆けつけた。この最後の強固な砦で、彼らは自らの主義に従い、最良で最も勇敢な犠牲を奉げてきた。彼らは今ここを立ち去るか、捕虜か奴隷となるかしかない。[...] 彼らはみな、ガリバルディ部隊の鮮やかな赤いチュニック、ギリシャ帽かピューリタンの羽のついた丸い帽子をつけ、長い髪の毛は風にたなびき、剛毅を漲らせている。彼らはこの悲劇的な闘争に参加する前にその犠牲を慮ってきた。民族の自由のため、生命やその他あらゆる物質的な恵みを捨ててこちらを選択した。彼らは過去を顧みず、この苦い危機から逃げることはない [...] ガリバルディの妻は馬に乗り従っているが、彼自身は目立つ白いチュニックを着ていた。その表情は中世の英雄そのもので、[...] 勝利しようと敗北しようと、人は彼の中に、社会正義に奉仕する男の姿を見るであろう。彼は望遠鏡で胸 牆から道路の前方を見て、遮るものがないのを確かめ、ローマ市街を振り返り城門から去っていった。人々の心は重く、目は焼けた石のように熱く、しばらく誰も涙ひとつ流さなかった。（TSGD 304）

*ローマ軍とフランス軍の戦闘跡地（非情な写実主義的描写）。

昨日私は、戦闘の場所へ行った。クワトロ・ヴェンティ宮殿とヴァッセロ宮殿はフランス軍とローマ軍が数日間激戦を繰り広げたところで、あたり一面めっちゃめっちゃに壊れ、美しいフレスコ画や絵画の破片が未だ、連続砲撃で開いた大きな穴の間の垂木たるきに貼りついており、そこが残骸の塊になった時にも兵士たち

は戦っていたと思うだけで、そら恐ろしかった。フランス軍は、最後の数日間まったく巧妙に隠れていた。私の経験不足な眼にも、フランス軍の緻密な作戦は奇跡的であり、この組織化された軍隊に対するイタリア軍の無能さが、初めてありありと分かった。[...] それから、蜂の巣のようにすっかりえぐられ破壊されたフランス軍の駐屯地に入った。骸骨のような二本の足がバリケードの山から突き出していた。その下で一匹の犬が兵士の死体にかかった砂を掻き出していたが、それが服のまま顔を上にして倒れているのを発見し、犬はぎよっとして死体を眺めた。(TSGD 310)

5. 革命家たちの敗走

- (1)ガリバルディ フランス軍からオーストリア軍に変わった追手をかわすためにヴェネツィア共和国を目指したが、サン・マリーノ共和国で3分の1、1500人になった部隊を解体。妻アニタの死。ローマ共和国の英雄伝説
- (2)マッツィーニ7日間ローマ市街散策→フランス船長の助けでマルセイユ到着
- (3)病院監督をしたベルジョヨージ侯爵夫人→マルタ島・イスタンブールに逃亡

E. スプリング夫妻への社会主義者宣言

共和国崩壊後、フラールは前年度結婚したイタリア貴族の夫と赤ん坊を携えてフィレンツェに行く。

1849年2月12日スプリング夫妻への手紙【革命の正統性】

*私は熱狂的な社会主義者になりました。他に何も慰めもないし、この時代の問題に対する解決策がないからです。[...] 平和的な方法が最善であるというあなたの意見は、心底正しいと思います。もし、誰かが平和的な道筋を見つけたら、それは神の御名によってなされるでしょう。しかし、もし、誰かが巨大な悪事に対して抵抗するのを辞めたら、それまで情熱的に構築した彼の業績は損なわれ、他の手段をとるべきか確信するでしょう。その間、私は自分の手を血で汚さずにいられるか確信が持てません。[...] あなたは、マーカス、クロアチア人がレベッカを辱め、息子を連れ去りオーストリア人の農奴にして血を流すのを許しますか？しかし、モーゼがエジプト人を殺した間、キリストは唾を吐きかけられ、その〈処刑〉に何の害もなかったのも事実です。[...] あなたはローマの神政政治に蹂躪されたら、全力でそれを振り払おうとしませんか？他の方法を練る機会を望みながら、何世紀も待とうとするのですか？ [...] キリストは弟子たちが暗い河を渡るのを見る必要はなかったのです。彼は独りで行きました。彼は預言者の心で、聖戦を予知していたのです
(Chevigny 489)

これこそ、熱狂的で闘志をみなぎらせ、預言者の威厳を持つフラーだと称賛するのはフラー伝記作家キャパーである。だが、革命の戦闘を恐れると同時に甘受するという率直さには、アメリカ娘の顔を覗かせるフラーの名状しがたい魅力がある。長い間、アメリカの奴隷制廃止協会は、完璧な平和主義者の集まりであった。だが、フラーの友人リディア・マリア・チャイルドがいち早くジョン・ブラウンのハーパース・フェリー襲撃を擁護したのは、彼女の心の片隅にフラーの面影を見たのではないかという意見もある。

書誌・参考文献

- Fuller, Margaret. *Summer on the Lakes, in 1843*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1991.
- *Woman in the Nineteenth Century and Other Writings*. World's Classics Oxford & New York: Oxford University Press, 1994.
- *Woman in the Nineteenth Century*. Ed. Reynolds, Larry J. New York: Norton, 1998.
- *The Essential Margaret Fuller*. Ed. Steele, Jeffrey. NY & London: Rutgers University Press, New Brunswick, New Jersey, 1992,1995.
- *The Portable Margaret Fuller*. Ed. Kelley, Mary. New York: Penguin, 1994.
- *"These Sad But Glorious Days"- Dispatches From Europe 1846-1850*, eds. Reynolds, Larry J. & Smith, Susan Belasco. New Haven, Conn.: Yale University Press, 1991. (略称 TSGD)
- *The Letters of Margaret Fuller* Vols. I-VI, ed. Hudspeth, Robert N. Ithaca, NY: Cornell University Press, 1994.
- *Memoirs of Margaret Fuller Ossoli* Volume I, II ed. J. F. Clarke, R. W. Emerson and William Henry Channing. Biblio Bazaar, LLC, 2011.
- *Margaret and Her Friends: Or, Ten Conversations with Margaret Fuller*, Eds. Wells, Caroline & Hearley, Dall. Biblio Bazaar, 2011.
- *Eckermann's Conversation with Goethe in the last years of His Life* in Ripley's *Speciman of Foreign Standard Literature*. Vol.IV Hilliard Gray and Co., 1839.
- Fuller Manuscript and Writing, Houghton Library, Harvard University.
- マーガレット・フラー『五大湖の夏』高野一良訳（未知谷、2011）
- 『十九世紀の女性』伊藤淑子訳（新水社 2013）
- Capper, Charles. *Margaret Fuller: An American Romantic Life—The Privat Years*. Oxford and NY: Oxford University Press, 1992.
- Capper, Charles. *Margaret Fuller: An American Romantic life – The Public Years*. 2007
- Diess, Joseph J. *The Roman Years of Margaret Fuller*. New York: Crowell, 1969. Dutton, New York, 1970.
- Matteson, John. *The Lives of Margaret Fuller: A Biography*. New York: Norton, 2012.
- Marshall, Megan. *Margaret Fuller: A New American Life*. Boston: Houghton Mifflin Harcourt, 2013.